

平成30年5月28日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13191

研究課題名(和文)近代「地域」の記述と『平家物語』の「記憶」をめぐる研究 史蹟紀行・郷土史を対象に

研究課題名(英文) Study on the description of the region in the modern era and the memory of "Heike Monogatari" - Focusing on surveys of regional historical literatures, historical relics and travel writing

研究代表者

久保 勇 (KUBO, Isamu)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：10323437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：当研究課題は、軍記文学が近代の地域において受容され、人々の「記憶」にどう働きかけ、地域振興に如何に活用されたかという問題を設定し、瀬戸内(屋島)・北陸(金沢、富山)・房総を対象に、「郷土史」編纂事業等に着目したものである。割拠する武士社会における地域の認識から、近代の天皇が現前化すること(巡幸行事)、近代経済活動において地域が相対化される行事(共進会開催等)により、「中央」との関係を再構築し、「地域」相互に共有可能なコードとして、軍記の「記憶」が引き出されていった実態を明らかにした。同時にこれらの行事を含めた「記憶」は、近代の「地域」住民にとってのアイデンティティ形成にも影響を与えている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research topic is to elucidate the question of how the Gunki monogatari (war tales) were accepted in regions and how they affected the society, in modern times. The target regions are Setouchi, Hokuriku, and Bohsoh, and we conducted research activities focusing on surveys of regional historical literatures. There is used knowledge of the Gunki monogatari (war tales) recalled in the memory of people, when the events (processions) of emperors' visits to the local sites occurred in the modern regions, and commercial associations' exhibitions were held. In addition, knowledge of the Gunki monogatari (war tales) has influenced the identity formation of residents in the regions.

研究分野：日本文学

キーワード：軍記 郷土史 地域研究 巡幸 共進会 地方改良運動 平家物語

1. 研究開始当初の背景

本研究は平成25年度～平成28年度に実施した基盤研究(C)「明治期の知とメディア言説を通して見た軍記文学の文化的展開に関する基礎的研究」の研究活動を通じて着想を得た、「地域における近代軍記物語享受史」という課題を深化させたものである。享受史と地域という問題意識に関わる学術的な背景として、『平家物語』の最終的な戦場となった壇ノ浦に関わる近世の紀行文等を蒐集・検討を加えた梶原正昭氏『平家残照』(1998)がある。また、梶原氏の研究に影響を受け「平家蟹」伝承を考証した鈴木彰氏の2論考(2008,2009)も看過できない成果である。こうした先行研究があるものの、軍記物語を通じて近代における「地域」の問題を正面から取り上げる研究は見ない。申請者は「明治期 平家 の文化的展開をめぐる一考察」(『人文研究』2015.3)を発表し、市原隆作『悲壮史蹟 屋島と壇の浦』(1911)を取り上げ、付載の旅行記「史蹟めぐり」に注目し本研究の問題意識を深化させた。また、現在も明治末年頃に千葉県内で「千葉氏」に関わる郷土史を叙した初期社会主義者たちの営みについても着目している。以上から、近代における「地域」の記述と軍記物語の存在との関係性を考究する - 既存の享受史研究の枠組みを超えた - 問題を設定するに至っている。叙上の問題設定から、研究対象とする地域は瀬戸内(讃岐・屋島古戦場周辺)・北陸(加賀・倶利伽羅峠等)と房総(県内各地、千葉氏)とし、対象時期は明治期から昭和10年代までに絞って、調査研究をおこなうこととした。屋島古戦場については、大正8年(1918)に設立された民間郷土史研究機関である「鎌田共済会」(岡田唯吉)や「屋島めぐり」を著した森田惣吉の活動等について明らかにする。北陸については、「倶利伽羅峠」(『検証・日本史の舞台』2010)で問題化した、源平史蹟と明治天皇巡幸の影響の詳細などについて深めていく。房総については『紀元二千六百年記念 房総叢書』(1940-44)の刊行以前、民間レベルや個人の諸活動を明らかにしていく。当該研究は軍記物語の享受史の問題を軸にしながら、同時代の文学営為との共鳴、歴史学研究の対象である「郷土史」叙述との距離、新たに産業として振興される「観光」への利用等々、諸隣接分野の成果を視野に入れつつ、学術分野を相互に架橋する課題設定という特色を有する。また、文学における享受・伝承資料としての「郷土史」の学問的有効性が再評価される結果も期待されるところである。さらに、対象とする3地域に限らず、今日の各地自治体における文化的諸事業・観光振興等(地方創生)にとって、「古い新しい」視点が提示されることも企図している。

2. 研究の目的

本研究は、明治から戦前までに至る時期、地

域を記述する際に想起され、実際に書き込まれた軍記物語の「記憶」(主として『平家物語』)の具体的な事例について調査・研究をおこなうものである。明治中頃から鉄道網発達に伴って地域往還の利便性が向上し、近代の「観光」が紀行文・史蹟案内の著述を伴って活発化となり、一方で明治末頃から地域において「郷土史」編纂事業が盛んになる。こうした「地域」の記述に『平家物語』等の軍記物語作品に関わる「記憶」が如何に描き込まれているか、その実態を明らかにするのが本研究の目的である。これにより、近代の地域振興諸事業において文学作品が果たした役割や問題等が明らかとなる。また、今日における「地域」文化活動の諸課題(地方創生)に有益な視点をもたらす波及効果も目論んでいる。

3. 研究の方法

本研究は、既述のとおり問題の所在と調査対象が明確であることから2年間で実施し、文献調査活動、調査データ集積、成果報告活動という3つの研究活動を柱とする。

文献調査・実地踏査(要・国内旅費)では対象地域にしか所蔵されていない「郷土史」や史談会・顕彰会(雑誌)や史蹟案内にかかる資料を調査する。対象地域は北陸・瀬戸内・房総とする。

調査データ集積(要・業者作業依頼)では、著作権保護期間満了のデジタル化済資料でも閲覧状態が悪いものが多いので、一定の校訂作業を施し、目録・資料集を作成する。

成果報告活動(要・その他経費)では、地域における文献調査活動と同時に各自治体関係者(図書館・文書館等)と交流をおこない、地域において成果報告(講演・論文投稿)を実施する。

4. 研究成果

郷土史編纂事業や史蹟案内等の近代における「地域」の記述において、『平家物語』の「記憶」が描かれるようになる契機として、以下の3点が明らかになった。

地方改良運動の影響:「郷土史」編纂事業の契機として、一般的に説明されていることだが、その具体的な展開について、千葉町に関する調査で確認した。

天皇の巡幸、皇族の巡啓行事:源平合戦など軍記に関わる史蹟を有する地域において、巡幸や巡啓において、「地域」を「中央」の歴史に相対化する具体的な営みとして、「地域」の記述が必要とされ、実践されたことが複数地域で共通して見いだされた。(北陸・屋島)

共進会の開催:殖産興業政策に基づき、全国各地で開催された産業博覧会である共進会の開催に併せ、史蹟案内の整備(観光案内)が整備され、源平合戦関連の遺物が注目されるという動向が見いだされた。(屋島・房総) また、全国的に軍記の「記憶」が共有され

るメディアとして、原典(テキスト)の読書経験のみならず、原典の現代語訳あるいは要約による著作物が「地誌」として広く受容されたことも注目すべき動向である。(大正期の「統計年鑑」によれば、大正初年から6年まで「地誌紀行」の著作数は「歴史」「伝記」を合わせた数よりも多く、明治後半期も同様であったことが推察される)代表的な著作として、野崎左文ほか『日本名勝地誌』(13冊)(博文館、明治26(1893)年~明治34(1901)年)、熊田葦城(宗次郎)『日本史蹟』(4巻2冊、昭文堂、明治41(1908)年~43(1910)年)、妹尾薇谷『日本史蹟文庫』(13冊、岡田文祥堂ほか、大正2(1913)年)が挙げられる。

【対象地域別の主な研究成果】《屋島》近代における源平合戦史蹟としての屋島を紹介する文献は、屋島保勝会『屋島名勝手引草』(明治31(1898)年)、香川県内務部第四課『讃岐案内』(宮脇開益堂、明治35(1902)年)、浜田権平『屋島案内記』明治41(1908)、森田惣吉『屋島めぐり』(宮脇開益堂、大正5(1917)年)、森田惣吉『大屋島』(昭和10(1935)年)、岡田唯吉『屋島史』(鎌田共済会、昭和16(1941)年)等がある。まず注目されるのは、県内務部による『讃岐案内』であり、同書は第八回関西府県連合共進会開催に際して編まれたことが明らかである。(「序」)同共進会は、同年4月11日から5月30日までの50日間の会期で304,063人の来場があったという。長期間に亘って多くの来訪者を得る地域は前近代の「名所」に多く指摘することができるが、「短期間」というのが「近代」に現れた傾向と言えよう。次いで注目されるのが、岡田唯吉の『屋島史』である。岡田が急遽小学校長を辞職し、鎌田共済会に入った事情について「さて、緊急的な事情とは何か。それは岡田の主事就任からわずか1ヶ月後に当時の皇太子裕仁親王(後の昭和天皇)が鎌田共済会に行啓するということであった」(『郷土博通信 2013秋』鎌田共済会2013)と述べられているように、皇太子行啓という国家的行事に地域の歴史叙述(岡田唯吉)が要請された事実を知ることができる。該地では明治36(1903)年に東宮(大正天皇)行啓があったことが前提となるが、明治35年の共進会開催と併せ、これらの全国規模の行事の開催地となることで、近代国家の一地域として「屋島」が位置づけられ、共有されるべき歴史的記憶として、地域から内発的に想起されていったと考えられる。

《北陸》北陸合戦の舞台となる富山・石川県に残る源平合戦史蹟に触れる地域の記述は、森田柿園『越中志徴 上・下』を代表として比較的多く存在していた。それだけに「近代」の源平史蹟に注目する記述は、大きな動機がない限り必要とされなかったと考えられる。特筆すべき動向は、明治42(1909)年、西礪波郡役所内におかれた「礪波山旧蹟保存会」

の存在である。これは、同年秋に嘉仁親王(大正天皇)が倶利伽羅古戦場へ行啓することに合わせて発足したものであり、これを記念して『西礪波郡紀要』が刊行されている。同会は、『源平倶利伽羅合戦一斑』(大正2(1913)年)を刊行しており、源平盛衰記や長門本を用いつつ、地域の口碑、現地地図等で構成された詳細なものである。ここでも「行啓」という行事が契機となっていることが指摘出来る。また、『源平倶利伽羅合戦一斑』が共進会開催をも視野に入れて刊行されていたことも想定できる。大正2(1913)年9月1日~10月20日まで約5週間開催された「関西一府六県連合共進会」は、会期中726,406人を動員したと伝えられている。これは『倶利伽羅・石動・宮島名所旧跡案内』(北陸民友社編、初1913年9月)に記載の情報によるもので、同名所旧跡案内にも源平合戦の史蹟が紹介されている。

《房総》本研究における房総地域についての成果は、「郷土史」それ自体の歴史的経緯について一般的に説明される内容について、千葉町の検討を通じて具体的に確認できたことである。たとえば「日露戦争後における地方改良運動の展開などにより、郷土史研究の機運が次第に高まった」(木村礎氏執筆「地方史」の項、『国史大辞典』)という理解である。第6代千葉町町長を務めた加藤久太郎『在職四年間』(1911)によれば、まず同町は「市制調査会」(明治42年10月3日、第1回開催、調査事務嘱託・白鳥健)を立ち上げたが、内務省主催の「第2回地方改良事業講習会・感化救済事業講習会」(同年10月11日~11月1日)の参加直後、「自治研究会」を立ち上げ定例会(毎月第2土曜日役場楼上)とした。正確な発足月は不明だが、明治42年中に「千葉氏研究会」も発足させ、翌明治43年4月5日以降議会の承認を得て定例化(毎月第1土曜日役場楼上)し、同年10月以降『千葉誌』編纂事業(起草者・白鳥健)に着手している。経緯のみで詳細な検証には及ばないが、地方改良事業講習会受講後、「自治研究会」発足にあたり加藤は「先づ地方制度の真理。及びその来由を究め。而して之を善用するよりせざるべからず」と述べており、「来由」=「歴史」を検証することの重要性を述べている。また、市制調査会担当の白鳥健が次第に『千葉誌』起草担当へ変わっていることが注目されるが、その事績については別に検討をおこなっている。

《その他》篠原合戦(実盛首塚等)の史蹟と隣接する片山津温泉開発との関係性について、近世の大聖寺藩史から遡及していく調査にも着手した。近世に時宗が実盛塚を巡錫地として往還し、大聖寺藩がそれを歓迎していた史的状況等の概略を把握している。また、敵島神社(宮島)の源平史蹟の基礎調査を実施し、江戸時代から軍記物語を積極的に参看し「名所図」に描かれ続けていた当地の特性が「長期的」であり、近代の「屋島」「北陸」

の「短期的」行事によってもたらされる軍記の「記憶」との相対化をはかることができた。【国内外における位置付けとインパクト】軍記物語研究の成果を「地域」の課題解決の方途としようとする本研究の着眼は、概ね以下の活動に活かされたと考える。学術的な方向性として、紀州地域の文化資源にかかる研究においてである。大戦の戦禍で失われた『宝満寺記』における無本覚心の伝承は、軍記の「記憶」を資料として収載する『西撰大観』（仲彦三郎編，1911）への目配せなしには論究できなかったものである。このような近代における史資料の有効性を示せたことは一定の達成であった。また、社会に還元される成果として、計画段階で掲げた通り、自治体における「地域」文化活動の諸課題（地方創生）に有益な視点をもたらす成果も得ている。その実践と成果は、千葉市における共同研究に移行することとなった。近代における軍記の「記憶」を、現代の市民と共有することにより、「地域」へのアイデンティティを醸成しようとする試みが、一つのモデルとなり得る基礎的な段階に到達したと考える。

【今後の展望】本研究で対象とした「史蹟紀行」「郷土史」の研究と地域の自治体（千葉市）との連携活動を通じて判明したことの一つに、地域文化資源をめぐる「物語」の重要性がある。郷土史が編まれる契機や「地域」の記述に携わった人々の伝記にまつわる成果は、それ自体が「物語」となり得る魅力を有する。学術的立場からは「研究史」と称されるものだが、人文科学研究の実践による地域における「物語」の創出は、これからの課題であると同時に人文科学の成果を社会実装していく一つの方途と考えられる。叙上の見通しの下に、本研究で未了の研究活動を継続しながら、基盤研究（C）「近代「地域」の記述と軍記物語の享受をめぐる総合的研究 郷土史・平家伝説を対象に」（平成30年度～平成32年度）を実践していく。本研究で着眼を得た軍記の「記憶」が想起あるいは人々に継承されていく事象に注目し、『西撰大観』（1911）を基軸に兵庫県域における調査活動、俊寛・安徳帝生存伝承等を有する鹿児島県硫黄島および「義経」伝承に関わる北海道平取町等を対象とする調査活動を展開していく。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

久保 勇，十三世紀末の紀州地域と「伝承」 - 延慶本『平家物語』・湯浅氏・無本覚心，『根来寺と延慶本『平家物語』・紀州地域の寺院空間と書物・言説』（アジア遊学 211），2017，158-170 頁

〔学会発表〕（計1件）

久保 勇，湯浅氏と無本覚心について 伝承世界の紀州，2016 夏・公開シンポジウム：湯浅氏をめぐる史と文学，2016 年 8 月 30 日，和歌山大学地域連携・生涯学習センター

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保 勇（KUBO, Isamu）
千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：1 0 3 2 3 4 3 7

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし